

濱島 拓美

B：宮城県コース

この地を訪れたのは、22年前、2回生の夏以来であった。初めて買った車で太平洋沿に北海道まで走破する計画の中で、仙台から国道45号線でガソリンスタンドが開店する時間まで車中泊をさせられた気仙沼の思い出が薄っすらと残っていただけというのが正直な所である。今思えば、極めて普通のありふれた町並みがそこにあり、普通の方々が普通に生活をしていたからこそ、同時2回生だった自分の記憶に残らなかったのだろう。

本日、南三陸志津川を訪問して想うことは、残念ながら次の22年後に今日この目を見た事は確実に残るといえることである。もちろんテレビのニュースや仕事関係で大量の情報はインプットされた上で訪問しているのだが、自分の五感を使ってインプットされる情報は質的に異なる物であった。ありふれた町並はなく、普通に生活してる方々はいない。自分たちのような見学・応援でくる人々、ボランティアで働いている方々、まだまだ復興とはほど遠い方々、復興の為に元気よく活躍している方々などなど何かしら「普通でない」空気を持って、津波に破壊された川沿の町並で同じ時間を共有していた。

防災センターにいた時間は、わずかに5分である。しかし、何時間、何十時間と見たニュースとは比較にならない密度の濃い5分間であり、20年たとうが40年たとうが消えない記憶を残すと思う。

東北地方の方々は我慢強いのかどうか分からないが、強烈なリーダーシップを発揮して、スピード感を持ってゴリゴリとした復興工事をしている感はなかったが、校友会の木村社長、佐々木副会長の元気な話を聞いていると、着実に一歩ずつ元の生活に戻っているのだなあと少し安心もした。自分自身が復興に協力できることは限られているが、1日も早く復興が終わり普通の人々が普通に生活している「初ドライブに浮かれている2回生の記憶」に残りえないありふれた町並を再構築してほしいと強く想った。